

議事要旨

あいさつ

出雲河川事務所 生態系ネットワークの取組は、斐伊川水系だけではなく、日本全国で広がりつつある。斐伊川水系においては、大型水鳥類にとっても重要な、水辺環境の保全・再生、またそれらを通じた地域経済の活性化が両立した生態系ネットワークの形成を目指すためにも、委員の皆様方からご意見をいただき、取組を進めて行きたい。

出席者紹介

(「出席者名簿」と「配席表」をもって紹介とする)

議事

(1) 規約の変更について

(「資料1：規約の変更について」の説明)

委員 「生息環境づくり部会」および「地域づくり部会」の2つの部会の目的の明確化、部会構成メンバーに、鳥取県、島根県並びに関係5市の方に新たに加入いただく方向で整理した。

(2) 生息環境づくりおよび地域づくりの検討・取組状況について

(「資料2：生態系ネットワークの推進に向けて」の説明)

委員 日本にはナベヅル、マナヅルというツルを中心に万羽単位のツルが渡来しているが、ほとんどが九州の出水に集中している。一旦感染性の強い病気が流行すると、種そのものの存続に影響を及ぼしかねないという状況の中、斐伊川河口において初めてナベヅル15羽が一冬を越した。斐伊川の中州が良好な埒環境になっていることと、良好な採食地や休息場が近隣に位置していることによって、ツル類が定着する可能性が高まったと考えられる。

委員 地元の者もこんなに良い環境があるということに気付いていないと思う。大型水鳥類は時間帯によって出現状況が異なるので、観光とのつなげ方は課題である。一方で、冬場の観光資源と考えると大事であるので、効果的な見せ方を模索して行きたい。

委員 野鳥の観察に適した時間について、情報発信を上手くできていない部分もある。ネイチャーセンターの近くに宿泊地がある、白鳥が飛来した、または帰郷した等の集中的な情報発信をした方が、地域の情報発信という点では大きいのではないかと考える。

委員 資料に示されているエコネット米の取組を進めるとなると、地域の農業者の十分な理解と販路の確保が重要となる。

一方で、米政策は政権が変わる度に变化する状況の中で、マーケットインの考え方において米づくりを進める方向性に变化する必要がある。その上で、物語づくりということも販売の面では重要である。

農業者の認識は常に環境保全型、無農薬、有機栽培というものがある中で、収益的に確保できる、消費者に喜ばれるお米づくりができるように、積極的に参加できるのではないかと思う。今、その流れになっていると思うので、積極的に支援をさせていただきたい。

事務局 漁業関係については、斐伊川河口に大型水鳥類の生息環境を創出するために、砂を投入する予定。浅場造成によってシジミの稚貝が定着しやすくなる等、双方にとってプラスになるような取組にして行きたい。

委員 鳥たちを惹きつける環境があることが、本当の意味での地域の宝になると思う。こうした理解を高めるためにも、生息環境づくり部会、地域づくり部会をよりリンクさせていくことが必要と感じた。本地域で取り組んでいる観光はエコツーリズム的な考え方である。そのため、地域の自然や生き物への理解を深めた地元の人材を育成し、輪を広げて行くことに力を入れていく必要がある。

委員 2つの部会が相補的に活動状況を認識し事業を進めていくこと、さらには自然や生き物への理解を深めた人材育成に力を注ぐことについて大変重要なご意見をいただいた。

委員 ワンド整備等の大型水鳥類の生息地づくりは、魚や他の生態系の生息についても配慮していただき、漁業者や漁連も含めた多角的な面で検討を進めてもらいたい。

委員 神戸川でのワンドや水位の異なる水辺環境の整備は、漁業振興と切り離したのではなく、稚魚の生息場、産卵場等もイメージして提案しているところであり、具体的な実施にあたっては、漁協のご意見もいただいて、設計、施工を進めたいと考えている。

(3) 今後の進め方(案)について

(「資料3：今後の進め方(案)について」の説明)

委員 今後の進め方については案ということで、方向性の確認の認識として捉えて良いのか。

事務局 今後の進め方については皆様からご意見をいただいて、それを参考に来年度実施して行きたいと考えている。

委員 エコツーリズムではガイドが同行し、説明をするので自然の面白みを感じてもらいやすく、満足度も高まるので、リピーターが多く、こうした人たちが地域を支えるサポーターにもなる。

環境保全型農業(減減栽培)は、かつては農産物販売戦略上の「売り」になっていたが、今は

日本全国で普及しており、今はそれがベースになっている。一筋縄ではいかないと思う。本地域では、生き物を育てている農地が、ここに飛来してくる鳥たちを育み、鳥もくらせる農業を行っていること売りにして行けば良いと思う。圃場整備を行う場合は、生き物の生息に配慮した田んぼの構造を積極的に残したり、作ったりして、農業を水鳥と関係させると発信力が高まると思う。

委員 通過型の従来の観光のあり方にとられることなく、エコツーリズムのように季節に応じた楽しみ方を感じてもらい、四季を通じて多くの観光客が訪れるような場所にして行きたい。

オブザーバー 農業はお米だけではないと思うので、稲作以外の農業者も参画できる地域づくりを進められないか、検討いただきたい。

事務局 先進的な取組は米を例としたものが多いが、本地域には稲作よりも畑作の方がメインという場所もあるので、畑作も視野に入れた検討が必要と感じている。

大型水鳥類と畑作物が、どのような関係で結びつけられるかについて、今後検討したい。

オブザーバー 圃場整備の方法は、地域の方々と話し合っ方向性を決定していくことは可能であると思う。

委員 稲作だけに頼らない農業を進めていく必要があり、そうした場所は冬場の大型水鳥類の採食地ともなり得る。出雲市の平田地区では大型規格の圃場整備が行われるが、安来市の西谷地区では大型規格の圃場整備が行えない代わりに自然環境を活かした有機農法が進んでおり、独自の農業モデルを作る取組が、各種メディアからも注目されている。

委員 各農業団体、漁業団体が描く未来図と本検討協議会が描く未来図が同じ方向性に向かっているければ、それは素晴らしいことだと思う。

委員 普段は中海をテーマに議論する機会が多いが、本地域全体として根幹の部分は共通する点がとても多いと感じ、すでに実施されているいろいろな活動がリンク、カバーし合っ大きな動きになればとても素晴らしい結果に結びつくと思う。

委員 鳥がいるからこそ広がる文化として、農業や漁業とあわせて一体的に伸ばしていくことが地域の魅力を高め、生産物の高い販売を行える状況を形成できると思う。

委員 来年度は自然再生計画の検討・策定を検討しているが、この流域全体の方向性を示すものと考えて良いのか。もう少し具体的な説明を聞きたい。

事務局 具体の話になると出雲市、松江市、安来市、米子市、境港市の5市のエリア全体に再度目を向けて、どういった保全、整備が可能かを洗い出す作業を行って行きたい。

委員 情報を外に発信することも大事だが、地元が盛り上げられないと事業は進みにくいと思うので、積極的に地元に向けての啓発を進めてほしい。

事務局 今後の普及啓発に関する具体的な内容としては、ロゴマーク、キャッチコピーを考えており、今年度はリーフレットを作成した。

地元の盛り上げは大事ではあるが、国交省だけでは限界もあるので、各自治体、五市長会等とも連携して、取組を進めていきたい。

委員 地元の子どもたちの、自分たちが住んでいる場所は豊かな環境が残る場所であるという認識を持ってもらえるような、普及啓発を積極的に進めていただきたいし、地方自治体に対してもこうした働きかけを行って行きたい。

また、観光の面で、バードウッチング初心者、ライト層を取り込むような仕組みづくり、こうした層への情報発信に関しても検討してほしい。

委員 本地域には、宍道湖の西岸に宍道湖グリーンパーク、中海の東岸に米子水鳥公園といった拠点施設があり、全国的に恵まれた環境なので、こうした拠点に立ち寄り、情報を入手してもらいたい。今後は、方向性を共有して、そこに向かってそれぞれのセクションが協働しながら進むということに尽きると思う。その時に、行政が進める施策と法制度等において、ハードルが出てくると思うが、課題を出し合い、調整し合う形が出来れば良いと思う。積極的な情報交換を進めて欲しい。

委員 関係自治体、関係機関の間で意見交換しながら、良い方向に進んで行ってほしいと思う。

閉会

事務局 来年度の進め方という点については、色々ご意見等をいただいたので、本検討協議会のメンバーの皆様方とご相談、連携しながら、着実に前に進んでいけるようにさらに取り組んで行きたい。

次回は、また改めて、調整したい。

以 上